



ネパールの旅

津 和 秀 夫*

ネパール王国

「ネパール」「ブータン」という国は小学校地理で習ったときから、名前が面白いので覚えていた。それが50年近い歳月の後に、2度までも訪づれるようになるうとは、思いもよらぬことであった。2年前にインドで国際会議があったときが最初で、今度は同じコースを男11名女14名のはでなパーティの団長となつての旅である。

ネパール王国は、面積本州の半分強、人口は1100万、低地は海拔50mの熱帯から、高地は、8000m余のヒマラヤまで続く。産業は農業が90%以上を占め、工業としては見るべきものがない。

この国は日本とタイと並んで西欧の侵略を防ぎ抜いた国である。流石の英国もネパール兵（ゲルガ兵）の精強には手を焼いて、終りに和睦をしている。今のネパールは300年の悪政を続けた幕府を倒し王政復古をして20年、教育と産業を興して隆昌に向おうと、明治維新のような勢いである。

民族は日本人とよく似ていて、同じように聡明勤勉である。アルプスの貧乏なスイスが精密機械工業を興すことによって世界一の富裕国となったと同じように、ヒマラヤのネパールも精密機械によって、100年、200年後にはスイスをしのぐ国になると、私は夢みている。

タジマハール

インドの首都デリーから南東へ300km、大平原の真ん中にアグラという古都がある。ここに世界的に有名なタジマハール（タジ王妃の墓）がある。

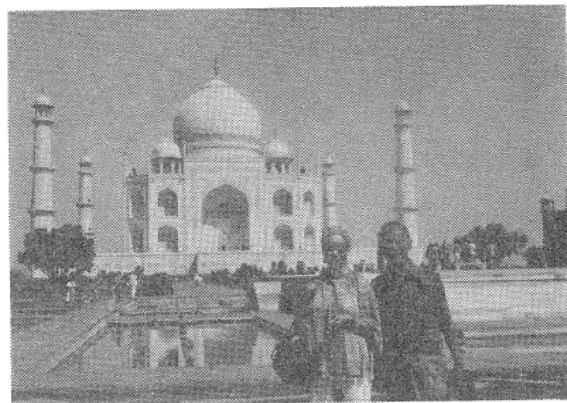


写真1 タジマハールを背景に美女と並ぶ筆者。

ハン大王は絶世の美女タジ王妃をこよなく愛した。しかし「美人薄命」のたとえの通り、王とともに南方遠征の陣中で没した。若く美しく、賢くて優しい世界一の女性を失って王の嘆きは如何ばかりであつただろう。死の直前に遺した「世界一の墓を」の言葉を実現させるために、王は2万人の労働者と22年の歳月をかけて、名実ともに世界一のタジマハールを造った。（写真1）

塔の高さは81m、それに応じて諸建造物が壮大である。美しい白大理石の殿堂は、熱帯の烈日に輝いて、えも言えない。壁、天井、床の大理石には色とりどりの貴石宝石をはめ込んで、美しい模様を描き出している。350年の昔の文化の高さが偲ばれる。

王は河の向い側に黒大理石で同じものを造って、自分の墓とする予定であつた。ところが流石に富を誇る大王も、財政窮乏のために工事を中断しなくてはならなかった。そして哀れにも、王子の代になって浪費王はアグラ城中の一室に幽閉されてしまった。王の居室からは美しいタジマハールが遠望される。日夜大王の胸中を去来するものは、果して何であつただろうか。王はここに7年で、没した。

*津和秀夫 (Hideo TSUWA), 大阪大学, 工学部, 精密工学科, 教授, 工博, 精密加工

ハーレム

アグラ城のハーレムを見た。池を中心とした石畳の周囲を、赤レンガ造りの2階建が取り巻いている。回廊がめぐらされ、各室は同じ規格で造られている。何のことはない、日本各地にある文化アパートといった感じである。

案内人は「後宮360人」と声を励ます。そして「王様には年間5日しか休みがない」とその勤勉さを讃える。週休2日など、王の字引にはないはず。王様たるものは超人的でなくては勤まるまい、と感嘆する。

とは言え、この後宮に360人はちょっと無理である。1室2人かな。王様臨御のときは1人は隣りに避難するかな。それとも王様のことゆえ、1人で2人を相手にするかな、と想像は楽しい。それというのも、神秘的な熱帯の古都の雰囲気なせる業である。

ちなみに日本で料理飲食店が玄関に盛り塩することの由来は、このハーレムから来ている。王様は夕方になると羊に乗って回廊をまわる。そして羊の止まった所に泊る習慣になっている。そこである賢い女は、羊の好物の塩を入口に撒いた。そこで羊は必ず止まり、彼女は寵を得たという。その故事に習って、日本でも盛り塩をして、お客の止まるのを願うという。

ところでインドの城や社寺には調度の類が全然ない。持ち去ることのできるものは総べて持ち去られている。タジマハールにしても、アグラ城にしても、想応しい豪華な調度に充ちていたことだろう。案内人は「イギリス人が奪い去った」と無然とした表情だった。

旅の空

インド大陸では、私たちの想像もつかないようなことが起こる。起きて当たり前なのである。ヨーロッパやアメリカの旅行とは趣が違ふ。私たちはデリーからネパールの首都カトマンズへ直接飛ぶ約束であった。ところが現地の旅行社はダメと言う。いろいろ話しても一向にらちがあかない。結局カルカッタまで後戻りしてネパールに入ることになった。予定より数時間はおくれるが同じ日のうちに着ける。

4カ月前から東京の支社と交渉し、OKとなっていたのに、と恨んで見てもせん方ない。東京とインドは違っていて、偉いさんが割り込むと予約もパーになるらしい。これがあなた任せの旅の空というものらしい。その代り旅程延長による運賃追加は取られなくてすんだ。

アグラに行った翌朝は4時半に起こされて飛行場へ向った。飛行場で朝食をとり、ボディチェックも済んで待合室に入った。これでヤレヤレである。午後には爽涼のカトマンズ、そして夜は立派なホテルで「先づ一献」と行こうと、心はしきりに楽しい。

ところが一向に飛行機の出る気配がない。アナウンスもない。係員に聞いても要領を得ない。「8時に出ます」が「10時」「12時」となる。インド人は慣れたもので、寝そべったり四方山ばなしをしたりで、ノンビリと待っている。結局機械の故障で8時間おくれてエアバスは飛んだ。その結果は、カルカッタ1泊で、ネパール行きは翌日となった。「旅の空」は予定通りには行かぬもの、という教訓を得た。

カルカッタの盗賊

カルカッタのダムダム空港に近い立派な新築ホテルに泊まった。私どもはダムダム弾を思い出す。ここで造られた鉛の小銃弾は、当れば鉛毒によって必ず死ぬので、交戦条約によって使用を禁止されている。ダムダムとはいやな名前である。その通り、ここではいやな盗賊に見舞われた。

バスで出発の間際、一行の社長大人がカウンターで呼び止められた。昨夜のバーでの支払がすんでないと言う。実は私ども7、8人の飲んべえは夕食後バーでウイスキーを傾むけた。社長大人が拂って呉れた。それをまた請求してきたのである。悪いことに彼はレシートを捨てている。

私も傍にいて英語で押問答をしたが、らちが明かない。勇ましい美女は「あんた、泥棒やないの」と日本語でタンカを切って睨み据えた。飛行機の時間もあることで、大人は2度目の拂いをした。私は領収証を書かせて、それを預かり、名刺を置いて、バーの係りが来て事情が判

ればここに送金せよと念を押した。

飛行場で通関の間際にホテルの男2人が走って来た。今度は巡査を2人連れている。私は、お金を返しに来た、と思った。ところが、また拂えと言う。私は大きな顔で領収証を突き付けた。ところが、眼鏡をかけてよく見ると、何とか商会のレシート、しかもインド語で何やら書いてある。計られたのである。今度は巡査までグルとはあきれ果てた。結局大人は3度拂わされた。私の名刺が書類にはってあるので、日本語で「コラ、返せ」と引きちぎって機中に入った。

70ドルを3回、約5万円余り、日本ではそれぐらいかかる。とは言え不愉快なできごとではあった。そしてことの起こりは、大人がバーで私のゴッシリ入った財布を見せたことにあると思った。

バスを押す

いやなインドの思い出をあとに、カルカッタを離陸した機は、目的地ネパールに向う。30分ほどすると遠くに陽光に輝くヒマラヤの連峰が見えて来た。ああ、ついに来た。今までの労苦はキレイに忘れ去って、心しきりに楽しく、何はともあれヒマラヤに乾盃する。

カトマンズ空港では、私どもの研究室に半年暮した日本語の達者なリシ青年が駆け寄ってくる。これからのネパール旅行は、総べて彼が日本語で案内する。もう大丈夫。

私たちは飛行機で30分、ヒマラヤに近い登山基地ポカラへ行く予定であった。ところが予定が狂ったためにバスで行かねばならない。直線距離で200km、しかも羊腸たる山道である。6時間以上かかる。

駐車場にいる貸切バスを見に行く。外観は立派なのに、驚ろいたことに、エンジンをスタートさせるために数人の男が一生懸命に押している。これはヒドイ。しかし乗りかかった船ならぬバスである。運を天に任せねばならない。知らぬが仏の団員をロビーから乗り込ませる。

バスは秋の陽を浴びて、ネパールの山道を進む。長野県あたりの山を行くようである。美しい風景、頂上まで耕された段々畑、一世紀前の

日本のような農家。バスの方がよかったと思った。ただ道の舗装が悪く、バスの動揺が激しいのには閉口する。

こうして4時間ぐらい走った夕刻の無舗装悪路で、バスは一瞬ガタンと止まった。運転手は電気回りを調べる。助手はバケツを持って谷を降りて水を汲んでくる。その水を後車軸にブッかけて過熱したブレーキを冷やす。かれこれ30分経って、いざ出発となったが、今度はエンジンがかからない。

夕暮れは迫っている。右は崖、左は深い谷、人家もなければ、通る車とともない。山賊でも出そうな物騒なところ、夜になると猪や猿が出るのは確実。これは大変なことになった。

とにかく全員降車して、バスを押すことになった。上り坂のデコボコ道、とても重かった。三ゆすりするとバスが動いて、ブルンブルンとエンジンがかかった。やれやれ助かったと、一同は歓声を挙げた。

バス河を渡る

日本なら、どんな田舎でもレストランやガソリンスタンドがあって、そこで用足しができる。ネパールにはそれが無い。仕方がないので、女性には人里離れた山かげで間に合わせてもらった。そのうちに夜になった。村落には電燈がない。子供のときに見たランプがともっている。一パイ飲み屋もあって、ランプの下で数人の男がガヤガヤやっている。いづこも同じと思った。

私たちはホテルのロビーに入ってビールやジュースを飲んだ。ロビーとは言っても十帖敷ぐらいの土間に机が2つと木の長椅子があるだけ。子供が勉強しているのを追い出して、母親が席を作って呉れた。小学校3年生ぐらいの子の教科書を見て驚ろいた。それは可成り程度の高い英語であった。

喉もうるおった。ポカラも近い。車中の気分も華やき、のど自慢大会が始まった。外を見れば黒々とした山また山、空は降るような星。日本で見る星の3倍くらいはありそう。異国のはて素晴らしい自然の中を、唯一台だけのバスは行く。幻想的な気分ひたっているとき、バス

が止まった。見れば橋が落ちている。

バスは坂道を通って河原へ降りた。助手が懐中電灯を照らして、ももまで水につかりながら浅瀬を調べる。川幅30m、しかし流れは速い。運転手は頃もよしとばかりに、エンジンをふかして河に乗り入れ、ハンドルにしがみつくようにして必死の運転をする。一同は肝を冷やし、かたづを呑んで成り行きを注視する。そしてバスが無事対岸に上ったときは、期せずして拍手が起こった。

ここからはポカラに近い。10時にホテルに着いてのおそい夕食は格別にうまかった。

霊峰マチャプチュレ

朝6時、夜が明けたので起き出して窓を開いた。正面にマチャプチュレ（魚の尾、6993m）が雲一つない大空に聳え立っている。アルプスのマッターホーンのような三角に尖った美しい山が目の前に朝日を受けて輝いている。その後にはアンナプルナの連峰（7900m級）が連なっている。（写真2）

ああ美しい。中天に届くかと思われるほどに高く近いマチャプチュレを中心に、左右にはもっと高いアンナプルナが見える。左から第一峰、第二峰、右側には第3、4峰と続く。これは正に最高の詩面である。アンナプルナあつてのマチャプチュレ、マチャプチュレあつてのアンナプルナと感じた。マチャプチュレは霊山として、一切の登山が禁止されている。

二年前に訪づれたときは、雲の間からチラリチラリと極く一部分を覗き見しただけだった。快晴の朝を迎えてよかった。苦勞してここまで



写真2 マチャプチュレ（中央）とアンナプルナ。



写真3 ポカラの一行、このとき連峰は雲にかくれかけている。

辿り付いた甲斐があった。団員一同も昨夜のバスの疲れを忘れ去って、ホテルの庭で大ハシャギである。

朝食後バスで登山基地ポカラを観光した。山に最も近い公園で記念撮影をしたが、そのときはもう山には雲が湧き上っていた。（写真3）

カトマンズの踊り子

その日のうちにバスでカトマンズへ着いた。バスも調子よく走ったし、団員の心も明るい。昨夜の河も、陽光のもとで見れば大したことはない。そしてカトマンズ盆地を一望のもとにする峠で休んだときの景観は素晴らしかった。周囲を山に抱かれて静かに眠っているような大都市、近代的なビルもあれば、古い寺院も見える。豊かな緑に被われた地は、正に伝統の王城の地である。私は京都や奈良を思い出した。

ホテルでくつろいだ後、一行はネパール踊りを見物に出掛けた。劇場とは似付きもしない小さな小屋である。もちろん観光客専門の営業、客席は50ぐらい。私たち25人は前の特等席、他には10数人のヨーロッパ観光客があった。団長の私はカブリツキの中央。

踊りが始まると、これが物すごく軽妙で面白い。太鼓や笛、それに琴、三味線のような楽器も出る。歌も声量があつて魅力的。マイクを口に当ててささやくような日本の流行歌とは迫力が違う。踊り子はいづれも猛烈な別嬪で、身のこなしが美しく愛嬌に溢れている。小柄で引きしまった体軀の男女がハダシで一生懸命に踊る姿には、人間の素朴さを感じる。これは文明社

会が忘れ去った踊りである。ネパールには交通の便がなかったので、数十の部族があり、それぞれに踊りがある。

その一つ、ヒマラヤに近い部族のシェルパの踊りを紹介しよう。美女2人が踊る。そこに若い男が出て来て踊る。彼女たちは男の踊りに見ほれる。男は一人の女を誘惑して共に踊る。それで止めとけばよいのに、今度は別の女を誘惑する。結局美女連合軍の攻撃を受けてもろくも退散する。他愛のないストーリーではあるが滅法に面白くて踊りがうまい。

ネパールの強い酒をいくらでも注いで呉れる。こうなるとカブリツキの紳士たるもの舞台に声を掛けねば失礼に当たる。孔雀が相手になりて来て、私の酒を呑んだり頭をつついたりして、満場ヤンヤの大喝采であった。その様子を一行中のお嬢さんが画いて呉れた(図1)。おかげでフィナーレのときは、観客を代表して舞台に上り、一番美しい踊り子と握手する恩恵に浴した。

神々の座

その翌朝はいよいよ旅のハイライト、マウンテンフライトである。カトマンズ空港から往復一時間の空の旅でヒマラヤを横から眺める。朝6時には朝食をとって、うす暗いうちにホテル

を出た。しかし戸外はひどい濃霧。カトマンズは盆地のため霧が深いという。空港に着いても外はただ乳色の霧ばかり。霧が晴れなければマウンテンフライトはできない。しかも霧の晴れるのがおそ過ぎても、今度はヒマラヤが雲にかくれて飛行は中止となる。

運を天に任せて待つよりほか仕方がない。待合室にいた英人は、予約した飛行機が飛べなくて、そのため毎朝来ているのに、数日間というもの空席がなくてヒマラヤを見れない、と嘆いていた。今日もし飛べても、私たち25人の団体があるから、恐らく駄目だろうと気の毒に思った。そんなことよりも、早く霧が晴れて呉れと、空港ロビーのスナックでお神酒ならぬビールを傾むけて八百萬の神々に祈った。

その祈りの甲斐あってか、うれしや霧が徐々に晴れて来た。滑走路がボンヤリ見える頃、塔乗の案内があった。そして50人乗双発プロペラ機は霧のカトマンズ空港を離陸した。そして雲の中を機は高度をとること10分足らず、雲の上に出たとたん、機窓の前方にヒマラヤの連峰が朝日にキラキラと輝いている。

この峰々、近付くにつれてその雄大さが超現実的なのに驚ろかされる。日本アルプスもスイスのアルプスも見したが、それらの2倍以上もある山々は、正に想像を絶する山容である。日本



図1 団長さんはクジャクさんに参った。

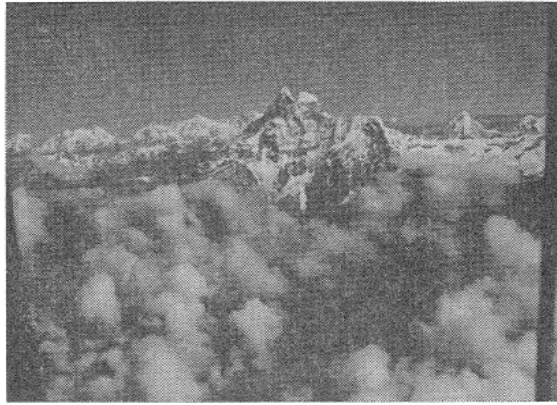


写真4 機窓から見る ガウリ サンカール。

で写真などから想像していた風光は、一瞬にして消え去った。

隣席の先輩は40年前の五高山岳部主将、阿蘇を庭として生きた猛者である。その先輩はヒマラヤを一目でも見たいと、40年間憧れ続けて来た。先輩は喰い入るように眺めながら、山の素人の私に「あれがエベレスト」「ガウリ サンカールはあれ」と説明して呉れる。

ヒマラヤに近付いた頃、機長からのアナウンスで「数人づつ操縦席に来て前の窓からごらん下さい」とある。行って見ると、その迫力の何と凄いこと、白いヒマラヤに吸い込まれて行くような感じであった。

いよいよ機は高度5000mの雲上を、ヒマラヤを真横にして飛ぶ。機窓から眺めれば、ヒマラヤは正に指呼の間である。

万古の氷に閉ざされた峻険な山々、剣を立てたようなものもあれば、平坦な山頂から直下数千メートルの断崖となるもの、三角形、鋸刃、その他形容できない峰々が続く。そして山々の間には万古の謎を秘めた氷河が流れる。（写真4）

私は機窓に顔を付けて、喰い入るように見つめながら「これは神々の座」と感じた。そして何かわからない涙がにじむのを覚えた。

旅の終り

旅の目的は終わった。あとはカトマンズ1泊、バンコック2泊で大阪へ帰る。気楽に観光したり、御婦人方のショッピングに付き合ったりで、楽しいことしきりである。その中の二、三。

カトマンズで買い物をした。そこの主人は私のブラ下げている懐中時計を売れという。私は

日頃デジタル腕時計を持っているが、これは時差を合わせるのが難かしいので、安物の懐中時計をズボンにブラ下げていた。梅田の地下で2500円で買ったものである。彼は10ドルで買うという。これは安物だからだめだと親切に言えば言うほど、彼は買いたがり、引出しから10ドル札を出して私の時計を強奪した。傍の日本美女は「あんた、これまけとき」と日本語の強引き。そして500円ぐらいの壁掛けが景品となった。「徳孤ならず」ということか。

カトマンズにはチベット難民部落がある。祖先伝来の樂園を中共に追い立てられた気の毒な人達である。手加工品を造って生計を立てている。このチベット人たちも日本人に似て、賢くて気がよい。私どもが立寄ったところ、可愛らしい子供たちが集まって来て、「もしもし亀よ亀さんよ……」と上手に歌う。私は嬉しくてたまらず、子供たちと一緒に手をたたき足を踏んで大声で歌った。（写真5）

ロイヤルネパール航空でバンコックに着いた。ホテルに行く前に蛇博物館に寄った。各種



写真5 チベットの子供と“もしもし亀よ”を歌う。

の大蛇毒蛇がウジャウジャ、女性は本能的に蛇がお嫌い。私が平気なので団長さんの株も上った模様。博物館の最後の見世場はマンガースと毒蛇の凄惨な死闘であった。負けた蛇の生き血をとって「これ千円」と呼び掛ける。25人の日本人は皆逃げ腰である。そこで団長たる私は、「日本人の名誉にかかわる」と千円札をテーブルにドンと置いた。味も何もなかった。しかし利くこと抜群、元気モリモリとはなった。（写真6）

バンコック最後の夜は中華料理でお別れパーティをした。現地駐在の友も来て呉れた。苦楽を共にした男女25人、今宵最後の宴を楽しもうと始めから大変な熱気である。一番の幸福者は私で、美女にテーブルを取り巻かれ、黒一点になったことではある。旅の回顧談やのど自慢が

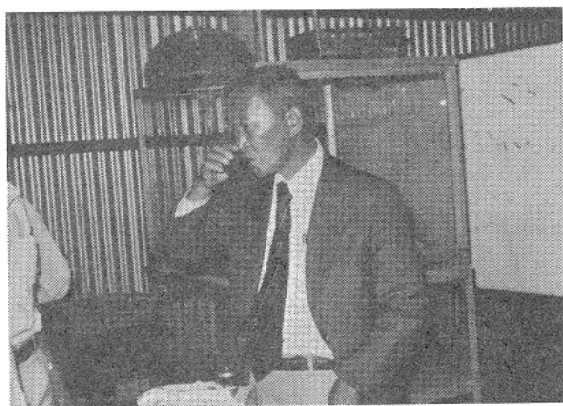


写真6 毒蛇の生き血を飲む一瞬。



写真7 団長の機中活躍勇姿。

出て、アッという間に夜が更けた。タイ人のサービス係男女は感じ入って団員の熱演に拍手していた。団長は取って置きの秘芸「ガマの油」を熱演した。

翌朝はタイ航空に乗って日本に向った。座席に着いて最後の仕事をした。それは使用済みの航空券ファイルを団員に返すことである。マジックインキで宛名を書き、「ありがとう」と書いて署名した。つらいこともあっただろう。行き届かない団長に不平も言いたかっただろう。だが団員はいつも朗らかで、よく苦しみを堪え忍んで下さった。一人一人についての思い出が湧き上る。ほんとうに「ありがとう」。それを書きながら、私は泣けて仕方がなかった。（写真7）

（昭. 54. 10. 20. 大阪空港着）

思い立ったが吉日

私の体験を話そう。私の親しい友人から弟の縁談が九州で進行中との話を聞いた。私がしゃしゃり出て相手のお嬢さんのご両親に直接お会いするのが、一番よいと判断した。そして数日後の日曜日に九州に飛ぶことに決めて、友人を前に、電話で航空券予約をした。

果たして、この神速果敢な攻撃が奏功して、縁談即決。もちろん私は仲人。いま彼等夫妻は琴瑟相和して二児の親となっている。

（むかしもの）